論文審査の結果の要旨

氏名：若　井　雅　之
博士の専攻分野の名称：博士（芸術学）
論文題目：大学生におけるキャリア支援のための役割演技プログラムの開発
　　―パフォーマンス学の知見を導入したプログラム開発―
審査委員：（主査）　教授　松　本　　洸
　　（副査）　教授　神　永　光　規　　講師　佐　藤　綾　子

近年、大学においてキャリア支援やキャリア教育の重要性が指摘されている。大学生における就職率はここ数年上昇しているが、就職活動においては、早くからいくつもの就職口が決まる学生がいる一方で、なかなか就職が決定しないで苦労している学生も多くおり、2極化している実態が指摘されている。また、就職後の短い期間で転職をする者も多くなっている。本論文の研究はこのような実態を踏まえて、大学生におけるキャリアの向上を支援するためのプログラム開発を目的に研究がすすめられた。本論文で論じている「キャリア」は、単なる「就職活動」や「職業上の経歴」のみを指すものではなく、より広義な「人生の中での自分の役割認識やその実現へ向けての積み重ね」という自己認識に根差した概念で使用している。

本論文は、大学生におけるキャリア支援を考える際に「パフォーマンス学」の理論を用いて、「役割演技」の方法を利用してプログラム開発をすることが第1の研究目的であり、そのプログラムが大学生のキャリア向上に有効であることを検証することを第2の研究目的として進められている。

論文の構成としては、第1章で研究の背景と目的および「キャリア」の定義を論じ、第2章から第4章までが先行研究と基礎知識、第5章で予備調査によるキャリア向上を測定する尺度を作成し、第6章がキャリア支援のためのプログラム開発、第7章がその効果の検証、そして第8章に総合的考察と結論という構成になっている。

論文内容の要約と評価は、以下のとおりである。

第1章は「本研究全体の背景と目的」である。研究の背景として、現在の大学生のキャリアを取り巻く実態を述べ、そこから大学生へのキャリア支援の必要性を説いた上で、キャリア支援のプログラム開発にパフォーマンス学の理論が有効であることを論じている。研究目的は、上述の通り第1に大学生におけるキャリア支援に有効なパフォーマンストレーニングのプログラムを開発することであり、第2にその開発したプログラムの効果を検証することである。また、この章で、「キャリア」の定義をしており、本研究では「人が、生涯の中で様々な役割を果たす過程で、自らの役割の価値や自分と役割との関係を見いだしていく連なりや積み重ね」という文部科学省(2011)の定義を採用して論を進めていくことを明確にしている。背景と研究目的への繋がり、およびそこに必要な理論を筋道をつけて論じている点は評価できる。

第2章は「キャリアの研究動向」である。国内外のキャリアの研究動向を明らかにしたうえで、特に大学生とキャリアに焦点を絞り、学生相談におけるキャリアの研究動向を論じている。キャリア支援は、国の政策としても注目されている。そこで、文部科学省や厚生労働省からの報告もまとめ、経済界からの報告についても言及している。キャリアに関する先行研究のみに限らず、わが国の行政機関や経済団体の報告書にも目を通して言及している点は、評価できる。

第3章は「パフォーマンス学の研究動向」である。日本でパフォーマンス学を牽引している佐藤の研究を紹介し、「パフォーマンス学」とはいかなる学問体系であるのかを明らかにしている。本研究では「役割演技」という技法に着目しているので、パフォーマンス学と演劇学の関係性についても特に詳細に論じている。キャリア支援に対して、どのようにパフォーマンス学の知見が活用されているのかについて、パフォーマンス学のトレーニングから導き出せるキャリアの要素を論じている。研究目的のパフォーマンス支援のためのプログラムに結びつける理論的根拠の章であり、その位置づけをしっかり論じている。

第4章は「役割演技の研究動向」を先行研究の紹介を含めて論じている。役割演技を提唱したモレノ（Moreno,J.L.）に直接師事したコルシニ(Corsini,R.J.)の指摘を踏まえて、「役割演技」という技法の意義

について詳細に検討している。また、役割演技という技法は演劇的な手法であるため、演劇学との関係性や、役割演技の研究動向についても概観している。前章のパフォーマンス学と演劇学の関係を論じたことに引き続いて、この章では役割演技と演劇学の関係を論じている。本研究が演劇学に通ずる研究であることを位置づける論を展開した点は、本論文が博士（芸術学）の学位論文であることを論者は意図して設けた章であり、評価に値する。

第５章は、「予備調査――大学生キャリア・パフォーマンス尺度の開発と大学生のキャリア・パフォーマンスに関する意識調査――」を実施し、その分析を行っている。その結果から、大学生が自らのキャリアを構築していく上で重要になるパフォーマンスに対する意識を、「自己発見」、「自己強化」、「自己表現」というパフォーマンス学の３つのステップ通りに成立することを検証し、「大学生キャリア・パフォーマンス尺度」を作成している。この尺度は、大学生のキャリア向上度を測定する道具として利用でき、この成果だけでも研究成果として評価できる。尺度の作成も、項目分析など緻密な尺度標準化のステップを踏んでいる点は高く評価できる。

第６章は、「大学生におけるキャリア支援のための役割演技プログラムの開発」であり、論者が開発したトレーニングの内容を説明している。これが本研究の第１の研究目的である。先行研究を参考にして、２つの役割演技場面を設定している。場面１は、パフォーマンス学における７つの非言語表現の要素について説明したのち、「就職活動における面接場面」を想定した舞台を設定している。また、場面２は、パフォーマンス学の３つのＣ（challenge，control，　commitment）について説明したのち、「新入社員として先輩社員に自己紹介をしたが、そっけない対応を受けた場面」を想定した舞台を設定している。この場面は、単に就職活動という範疇を超えて、より広い意味でのキャリアを考える契機となるようなプログラム構成となっている。パフォーマンス学の各種のトレーニング・プログラムに新らたにキャリア向上のためのプログラムを開発して加えた点は評価できる。また、パフォーマンス学のみならず大学生のキャリア支援に関する研究に新たな知見をもたらす研究として評価したい。

第７章は、「大学生におけるキャリア支援のための役割演技プログラムの検証」を論じている。大学生キャリア・パフォーマンス自己発見尺度、大学生キャリア・パフォーマンス自己表現尺度、自尊感情尺度が共に、実施前より実施後の方が統計的に有意に高い得点を示した。検証の結果、研究協力者はプログラムに参加することを通じて自身のキャリア構築に関する意識が向上したことが示された。論者が開発したキャリア支援のためのプログラムを体験することによって、キャリア構築に関する意識が向上されたことを尺度データで検証したことになり、開発したプログラムが有効であったことを実証した。本研究の第２の研究目的が達成されたことになる。統計データによる検定等の処理も的確であり、分析力、統計処理能力を評価する。

第８章は、「総合的考察」である。本研究全体の総合的な考察を行い、上述の第１の目的、第２の目的ともに達成されたことを結論として述べている。大学生のキャリア教育の必要性が指摘されている昨今において、自分自身を表現する力を育成することは必要不可欠な課題であり、キャリア構築に関する意識の向上が確認できた本プログラムは、大学生におけるキャリア支援に寄与しうるプログラムであることを明確に示した。

本論文は、第１章から第８章までが筋道よく論述されており、大学生におけるキャリア・アップのためのパフォーマンストレーニング・プログラムの開発を行い、そのプログラムの有効性を実証するという画期的な研究である。大学生に対するキャリア支援のための教育プログラムは大学の就職ガイダンスの一環としても利用可能であるものとなっている。また、予備調査で、大学生がどのくらいのキャリア構築ができているかを測定する尺度を作成している。この尺度は、本論文では予備調査での成果であるため研究目的では強調されていないが、研究成果としては大きな収穫である。この尺度は今後の研究にも活用され得るだけの測定道具となっていると評価する。

よって本論文は、博士（芸術学）の学位を授与されるに値するものと認められる。

以　　上

平成２９年１月３０日